

感染症発生動向調査委員会報告 8月

今月のトピックス

0157等、腸管出血性大腸菌感染症の発生が、引き続き多く報告されています。

百日咳で、20歳以上の報告が目立ちます。

後天性免疫不全症候群(エイズ)の報告が続いています。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年7月23日から平成19年8月26日まで(平成19年第30週から第34週まで。ただし、性感染症については平成19年7月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成19年 週 月日対照表

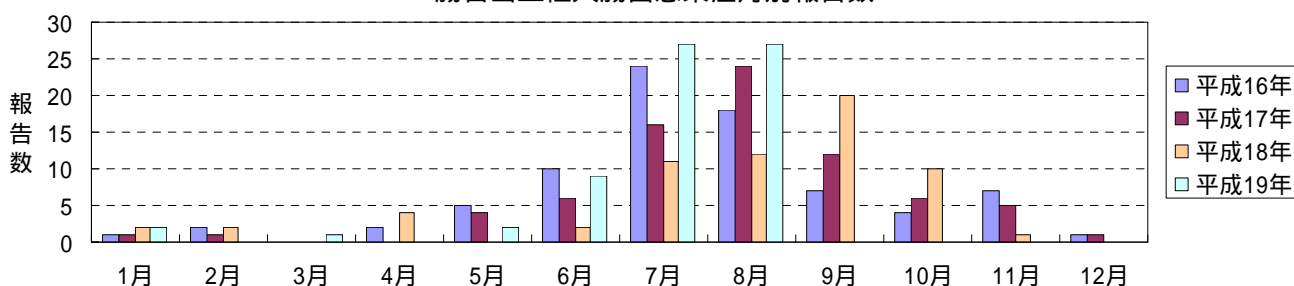
第30週	7月22～29日
第31週	7月30～8月5日
第32週	8月6～12日
第33週	8月13～19日
第34週	8月20～26日

全数報告疾患

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

毎年、夏に報告が多くなります。今年も、6月から報告が増え、7月は27例、8月は30日現在で27例となっています。年齢の内訳は、10歳未満が9例、10代が4例、20代が3例、30代が2例、40代が5例、50代が1例、60代が2例、70

腸管出血性大腸菌感染症月別報告数



代が1例でした。全国でも多く報告されており、注意が必要です。

予防対策の詳細については、以下をご覧ください。

「腸管出血性大腸菌感染症 0157に注意しましょう」(横浜市衛生研究所作成チラシ)

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/o1572007.pdf

腸管出血性大腸菌Q & A (厚生労働省 2007年8月改訂)

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou19/index.html>

< レジオネラ症 >

8月も2例と4月から毎月報告があり、今年は今時点での合計が18例で、平成17年の8例、18年の7例に比

べて、かなり多くなっています。レジオネラ症については、平成15年4月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります、注意が必要です。

< 後天性免疫不全症候群 >

ほぼ毎月報告があり、8月は4例のうち2例がエイズ発症者でした。早期発見は、早期治療と拡大防止に結びつくので、無料匿名検査のPRや、予防に関する普及啓発に努めることが重要です。

横浜市でのエイズ相談・検査事業 <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/14577.html>

その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu)

定点報告疾患

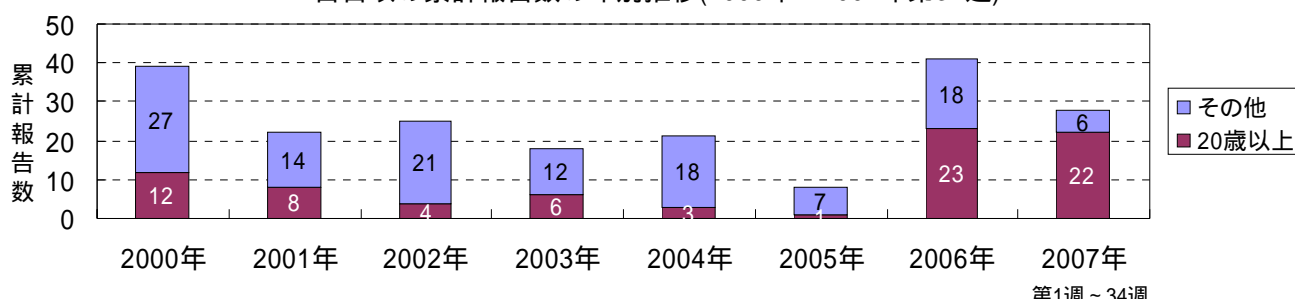
< 百日咳 >

全国では、2000年にやや大きな流行があり、今年はそれに次ぐ流行になりそうな様子で患者の3割が20歳以上と、成人の割合が増加した事も大きな特徴です。横浜市では、2000年は年間報告数が39人で、昨年はそれより多く41人の報告がありました。グラフに示したように、以前より成人の報告が見られていますが、昨年にその割合が大きく増加し、今年は、現時点でほぼ同数、割合ではさらに大きくなっています。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、ことに生後6か月以下では死に至る危険性もあるため、注意が必要です。

百日咳の年齢層別患者報告数(2007年第1週～第34週)

年齢層	～5ヶ月	～11ヶ月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20歳以上
報告数	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2	1	22

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2007年第34週)



< 咽頭結膜熱 >

昨年は、ピークが定点あたり1.76で長期間にわたる大きな流行がありましたが、今年は、第27週の0.65がピークではっきりした山も見られず、第34週は0.23でした。今後は、横ばいが続くと思われます。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

今年は、過去5年間と比べても一番高い値が続いていましたが、第24週以降は減少傾向が続いており、第34週は定点あたり0.30と、ほぼ例年並みでした。ただ、例年8月が一番少なく、秋から冬にかけて少し増えていくので、9月末に向けては、また、動向に注意が必要です。

< 手足口病 >

例年、第28～29週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第41週でし

た。今年は、7月中旬から8月中旬にかけて、昨年の秋程度の小さな山が見られ、ピークは第31週の定点あたり1.33でした。その後は減少し、第34週は0.46と、全国と比べても低い値になっています。全国では、第33週で0.85と3週連続で減少していますが、秋にやや高めで横ばいが続く傾向があるので、今後も、動向には注意が必要です。

< ヘルパンギーナ >

夏季に流行する疾患で、例年7月中旬頃にピークとなりますが、昨年は立ち上がりが5月末と早く、ピークも第26週でした。今年は、逆に立ち上がりが遅く、7月に入って増加し、第30週の定点あたり6.0をピークに、その後減少しています。第34週は1.54と、終息に向かっています。

< 麻疹 >

第14週(4月初旬)から続いていた小児科定点からの患者報告は、第22週の14人をピークに減少し、第30週に0人になりました。その後散発が見られ、第31週には10～14歳が2人、20歳以上が1人の計3人、第32週には6～11か月が1人、6歳が1人の計2人の報告がありました。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症で15～19歳の女性1人と男性2人の報告があり、また、性器ヘルペス感染症でも15～19歳の男性1人の報告があり、先月同様、若年女性だけでなく、若年男性への性感染症の拡がり心配されます。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2007年8月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点20件(咽頭ぬぐい液)、基幹定点10件(髄液4件、咽頭ぬぐい液3件、便3件)、眼科定点1件(結膜ぬぐい液)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎13人、ヘルパンギーナ3人、胃腸炎2人、手足口病、発疹各1人、基幹定点は無菌性髄膜炎の疑い、脳症、発熱、血球貪食症候群各1人、眼科定点は流行性角結膜炎1人でした。

9月10日現在、小児科定点の気道炎患者1人の検体からアデノウイルス1型、ヘルパンギーナ患者1人の検体からコクサッキーウイルスA5型が分離されています。

これ以外に、PCR検査では、小児科定点の気道炎患者1人の検体からコクサッキーウイルスA2型、ヘルパンギーナ患者1人の検体からコクサッキーウイルスA5型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

8月の感染性胃腸炎関係の受付は15菌株で腸管病原性大腸菌および腸管出血性大腸菌が各1件検出されました。